

# 「Chomsky の考え」から

## 「Chomsky 的考え」へ

岩 立 志津夫

言語獲得過程は古くから心理学者達の研究対象の1つで、言語獲得に関するすぐれた成果もすでに数多く発表されている(Wundt, 1912; Stern and Stern, 1907; Leopold, 1939—1949)。しかし、研究の質・量から見て、この領域での研究が飛躍的に発展したのは、言語学者 N. Chomsky の画期的な著書『文法の構造』(Syntactic structures, 1957) の発刊以後のことである。この著書に影響された一連の心理学研究は、通常、「生成文法的アプローチ」と呼ばれ、主に、米国の学者達によって、この種の研究は推進されてきた。米国でのこの辺の流れについては、多くの翻訳(Slobin, 1975; Morton, 1976; McNeill, 1972; Sinclair, 1978)や紹介(村田, 1977; 大久保, 1975; 坂野・天野, 1976; 宮原, 1977; 宮原・宮原, 1973, 1975)を通して、我国の心理学者にもよく知られている。生成文法的な研究は一時我国でも注目され、日本心理学会や日本教育心理学会で、多くの研究が発表されたが、現在は、その数も減り、反省・評価の時期に来ているように思える。生成文法的なアプローチに対する現在の大方の評価は、否定的で、それとは違った形で、新しい方向での研究の必要性が説かれている(古関, 1978; 大浜, 1978; 山田, 1980; 村田, 1981)。

しかし、生成文法的なアプローチは、本当に否定されるべき運命にあるのであろうか? この小論の目的は、生成文法的な立場から言語獲得に関する研究を続けて来た者の1人として、現在の研究の成果・水準の一部を明確にすることから、生成文法的アプローチの今後の可能性を探ることにある。

「Chomsky の考え」から「Chomsky 的思考」へ（岩立）

## 1. 「Chomsky の考え」と「Chomsky 的思考」

生成文法的な言語獲得研究に対する評価をしようとする場合、どうしても明確にして置く必要のあることがいくつかある。その1つが、「Chomsky の考え」と「Chomsky 的思考」の区別である。この区別があいまいであることから、生成文法的な研究は不当な批判と評価を受けている。筆者の考えは、「Chomsky 的思考」で、「Chomsky の」考えではない。

### 1.1 Chomsky の考え

ここで言う「Chomsky の考え」とは、Chomsky 自身が述べている主張のことである。彼自身は筆者の知る限り自ら幼児言語に関する実証的な研究をしていないが、彼の言語理論や言語哲学との関連で、言語獲得に関して、積極的に発言している。彼の発言の中心は、言語獲得における「生得性」の主張である。この主張は多くの誤解を産んでいるが、この主張の本来の意味は、神尾の論文（1973, 1977）を参考にして述べれば、次の通りである。

Chomsky によれば、人間の言語について考える場合、「言語構造」と「言語行動」をハッキリ区別する必要がある。言語構造は、厳密に規定可能な、一定の型式（普遍的構造）をもつ、体系的な知識として人々の脳裡に習得されたものである。言語行動は、この言語構造を前提としているが、言語構造には外形からの表面的な観察では到底うかがい知れないという特徴がある。ところが、幼児は驚くほどはやくことばを獲得する（言語行動が可能になる）。これを説明するには、言語構造についての知識の基本的な部分は、幼児に潜在的に、そして生得的に与えられているもので、後天的に学習されたものではない、と推論するほかはない。

Chomsky のこの考えには、いくつかの仮説ないし主張が含まれている。後の論述の参考にそれらを次の4つにまとめておく。

- (1) 言語構造と言語行動の区別
- (2) 言語行動は言語構造を前提として成り立つ
- (3) 言語構造は外形からはうかがいしれない
- (4) 幼児は驚くほどはやくことばを獲得する

## 1.2 Chomsky 的考え

Chomsky 的考えとは、彼の考えではなく、Chomsky 的発想から思考を進めることである。Chomsky の言語論は、多くの紹介（例えば、月刊言語 特集「チョムスキー理論の展開」1977, Vol. 6, No. 3）が明らかにしている通り、時期的に変化している（普通、その変化は「標準理論→拡大標準理論→痕跡理論」という形で記述される）。しかし変化がありながら、Chomsky の基本的な言語観はそれ程変化してはいない。すなわち、原田（1977）によれば、Chomsky の理論の根底には言語観での統一性がある。ここで言う統一性とは、「個別言語の理論（言い換えれば、その言語の文法）とは、(1)その言語を母語として話す者（母国語話者）に受け容れられる文をそうでない文から区別し、(2)前者の文に対して、母国語話者をもつ種々の直感を説明できるような構造記述を与える規則体系である」（原田、1977）とする立場をとりつづけていることである。原田の記述の第1の点は、文法と、是非文と文を区別する装置と考えることで、第2の点は、その区別を規則体系で行うことである。

上記の2点（①非文と文の区別を、②一定の規則体系で記述する）に注目して、言語獲得研究に向かう立場が、「Chomsky 的考え」に基づく言語獲得研究で、この種の積極的研究は、Brown 達の研究（1964）にはじまる。そして、岩立が以前から主張するように（岩立、1979 a, 1979 b, 1981 a, 1981 b）、この種の研究には、次の2つの流れがある。

- (1) 実証的な形での資料の収集と分析
- (2) 実証的な資料にもとづく生成文法の作製

「Chomsky の考え」から「Chomsky 的考え」へ (岩立)

これらの2つの流れは、相補的關係にあり、両者は、助け合って進んで行くのが望ましい。米国での研究の流れは、まさにそのようなものであったし、今もそうである。

## 2. 幼児期における文法とは？

今ここに2つの発話がある。

(1) ニーチャン コレ カイテゴラン

(2) コレ ダレ カイタノ

これらの2つの発話は、成人の日本語話者にとっては適格文、すなわち、普通の日本語文である。しかし同じ発話も、「ある子供のある時点での」という限定を設けて文法的適格性という視点から眺めると、事情は違い、(1)の発話は不適格文だが、(2)の発話は適格文である。なぜならば、ある子供のある時点での発話として、(2)の発話は可能だが、(1)の発話は不可能と予想されるからである。その理由は2つで、第1が、(1)の発話の語順が不適切であるという点、第2が、(1)の発話の動詞が不適切であるという点である。

語順が不適切という理由は、ジローと呼ばれる1人の男児の動詞「かく」での「ガ格」(格助詞「ガ」があるか、又はそれが補える語に対する記号)と「ヨ格」(格助詞「ヨ」があるか、又はそれが補える語に対する記号)の語順関係が、2歳2月から2歳8月の年齢段階では、

(3) ヨ格+ガ格

と推定されるからである(岩立 1981b)。

動詞形が不適切な理由は、2歳8月にならないと、ジローでは「カイテゴラン」という動詞形が生じていないからである(岩立 1980)。

したがって、(1)の発話は、

(4) コレ ニーチャン カイテ

というふうに意味的・機能的に似た文に書き換えられるならば、適格文にな

「Chomsky の考え」から「Chomsky 的思考」へ（岩立）

る。

このように、特定の子供と特定の時期を考え、その特定の範囲内で、その子供にとっての発話可能性を追求していくと、そこに一種の文法の存在を仮定できる。文法は通常、成人の母国語話者を対象として仮定されるものだが、前述の Chomsky 的思考を純粹にとれば、子供の時期にもその存在を仮定できる。

### 3. 文法として記述する必要があるもの

—共通部分と相違部分—

#### 3.1 3つの困難

文法作製のための道具の開発を目的として、文法の形式的側面だけを研究することも重要である。しかし、実証的裏づけのない形式だけが整った文法は、心理学的にみた場合、あまり得るところがない。なぜならば、科学的研究の目的の一つに応用可能性があるとした場合、実証的な資料に基づく文法からこそ、応用面での可能性が生まれてくるのに対して、実証的裏づけのない文法は単なる知的遊びで終わる危険があるからである。

しかしながら、言語発達に関する実証的資料を得る、また、言語発達の実態を把握するには、いくつかの困難が伴う。たとえば、主なものとして、次の3つが考えられる。

##### 3.1.1 子供の言語能力は直接本人にたずねるわけにはいかない

大人ならば、「この文は正しいですか?」「この文とこの文は同じですか?」などと、直接、疑問点を問い質すことができるのに対して、子供の場合には、実験や観察を通して間接的に、言語発達の実態を推定するほかはない。

##### 3.1.2 子供は発達し、変化してしまう

「Chomsky の考え」から「Chomsky 的思考」へ (岩立)

この点での困難には2つの側面がある。その第1が、ある子供からある面での資料を取り忘れると、子供は2度と同じ段階には戻ってこないで、もう永遠にその面での資料がとれなくなるという面、第2が、取り忘れた資料を別の子供で取りなおしても、後の子供の資料が前の子供のものと同じであるという保証がないという面である。

### 3.1.3 言語発達は、精密で、複雑な形で進行する

もし言語発達が、単純な学習論者がいうように、単なる条件づけの重ね合わせの結果だけのものならばよいが、そうではないと予想される。言語発達は、発達順序性 (例えば、Bloom (1970) の否定語の研究) や相互作用 (例えば Sinclair (1978) の、認知と言語の関係についての研究) に代表されるように、ある種の規則のもとで進行する。さらに、その規則は、巨視的に見てはじめて形が出てくる大雑把なものではなく、微視的なレベルのものと考えられる。

## 3.2 共通部分と相違部分

3.1 で述べた3つの困難を打破して、実証的な裏づけを持つ文法作製の、真に参考になる資料を集めるにはどうしたらよいか? この問いに対し現在考えられる最善の答えの1つは、ある現象ないし規則が、「共通部分」か、それとも、「相違部分」かを問う、地道な努力をし続けることといえる。

この種の地道で基礎的な、それも、多くの人が共同して行う言語発達研究は、米国では盛んで、そこから出て来た成果は、理論面でのいくつかの変化 (例えば、研究の主眼が統語的側面から意味的側面、さらに実用論的側面に移ったなど) の後でも、重要な資料として使われている。この事情は、過去の各種の資料を再分析・再検討している Brown の著書 (1973) が端的に例示している。それに比較して、我国では、信頼できる基礎的な資料に乏しく、その乏しい資料が互いに比較検討されることもほとんどない。



「Chomsky の考え」から「Chomsky 的考え」へ (岩立)

う動詞の意味するところを明確にするために、この動詞は、「行く人、また、ものを示す名詞句」(ガ格)や「目的地を示す名詞句」(エ格またはニ格)や「手段を示す名詞句」(デ格)と一定の格枠をつくっている。この格枠は、子供に最初からあるわけではなく、徐々に年齢増加にともない形成されてくると考えられる。その一例が、表1である。表1は、2人の日本語児(岩立(1979b))によるジローと呼ばれる男児と、綿巻(1979)によるフミと呼ばれる女児から得られた発話の分布分析から得られたものである。表に示されたものは、得られた結果のほんの一部で、それらは、次からの議論の参考になるもの、また、2人の子供で共通するもの、という基準で選ばれた。

次に、表1をもとに、ジローとフミの間にある共通部分と相違部分を指摘する。

共通部分は2つで、第1が、かなり安定した語順が2種の動詞を通して存在するという点、第2が、2種の中の片方の動詞(「行く」)で、同種の格(「ガ格」と「ニ格」)が、長期間にわたってよく使われる点である。

相違部分としては、2種の中の残りの動詞(「帰る」)で、よく使われる格が、両児で、違っている(フミの場合「ガ格」なのに対し、ジローの場合には「ニ格」である)点があげられる。

### 3.2.2 個人内における、共通部分と相違部分① 一動詞形の発達—

個人内における共通部分と相違部分の例として、第1にとりあげるのは、ジローの発話における動詞形の変化である(図1・図2、岩立(1980))。図1は動詞「たべる」の場合、図2は動詞「つくる」の場合で、図中の動詞形はその動詞形の初めての出現時期を示している。図1によれば、2歳1月に「タベル」という動詞形が使われはじめ、2歳2月に「タベテ」という動詞形が使われはじめたことがわかる。

次に、動詞形の年齢変化にともなう共通部分と相違部分を示す。



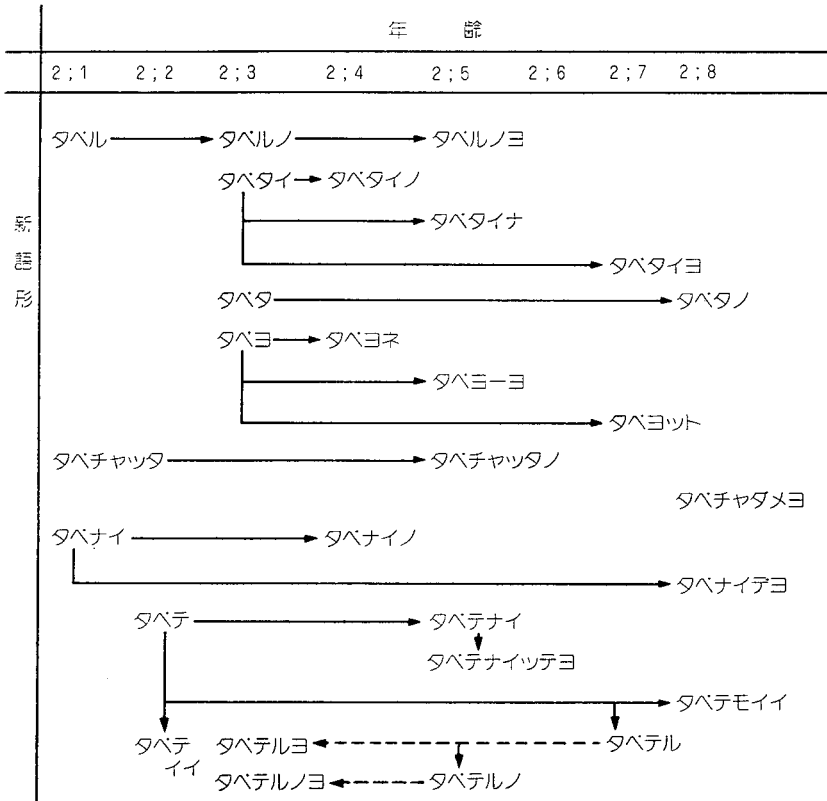


図1 動詞「たべる」での新語形の年齢変化

共通部分としては、1つの仮説（くっつき説）の存在があげられる。この仮説は、図1・2中の2種の矢印（実線と破線）によって説明される。くっつき説は、

新動詞形 = 古動詞形 + 形態（素）

という式で説明される。図1・2中の、実線で右向き矢印は仮説を支持し、実線で下向き矢印は仮説に対して中立で、破線で左向き矢印は仮説に矛盾する。図1には右向きの実線が多く、仮説で示される共通の傾向の存在が予想

「Chomsky の考え」から「Chomsky 的考え」へ (岩立)

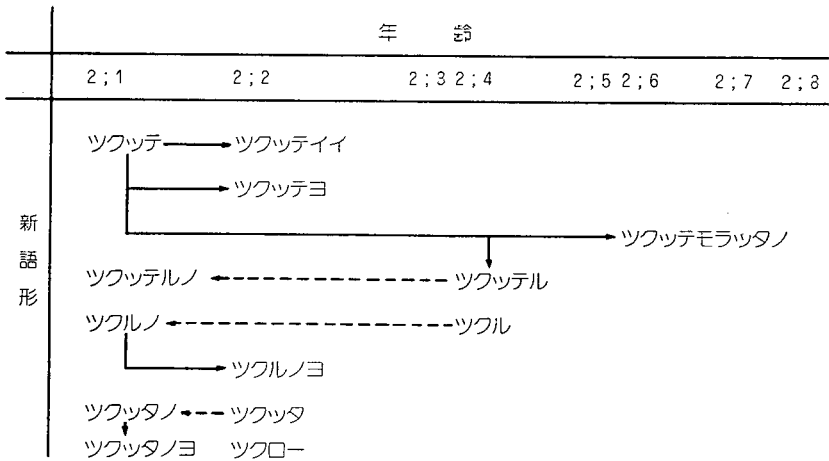


図2 動詞「つくる」での新語形の年齢変化

される (詳細は岩立(1980)参照)。

相違部分としては、ある特定の形態(素)が必ずしも特定の時期に集中的に獲得されるわけではない点があげられる。ある特定の形態(素)は特定の意味をもっているため、特定の時期に集中して、獲得される可能性があるが、実際には必ずしもそうはなっていない。例えば、図1によれば、否定語形の1つである「タベナイ」が2歳1月に生じているのに、同じ否定形の1つである「タベテナイ」は、2歳2月の「タベテ」を介して、2歳5月になってはじめて生じている。また、図2が示しているように、動詞「つくる」の場合には、否定形「ナイ」を含む動詞形は生じていない。同じ個人の、同じ否定形にかかわらず、否定形の獲得時期は、シローの場合、同じ動詞内でも、違う動詞間でも違いが存在する。

3.2.3 個人内における、共通部分と相違部分② 一格枠の違い一

3.2.1 で見た通り、個人間には、確固とした格枠にもとづく語順が存在する

「Chomsky の考え」から「Chomsky 的考え」へ (岩立)

という共通の特徴がある一方で、その語順の中身が違っているという相違点もある。このことは、個人内でも生じるらしい。

例えば、ジローとよばれる男児の動詞ごとの格枠を、他動詞 (格助詞「ガ」と「ヲ」と主に結びつく動詞) に限って調べると、いくつかの特徴が浮かびあがってくる (岩立 1981 b)。すなわち、3つの動詞 (「かく」「たべる」「つくる」) の基本的な、格と動詞の語順関係は次の通りである (記号は表1と同じである)。

- (1) 動詞「かく」での基本語順

$$\text{Ni} + \text{Op} + \text{O} + \text{Ga} + \text{V}$$

- (2) 動詞「たべる」での基本語順

$$\text{Ga} + \text{Op} + \text{O} + \text{V}$$

- (3) 動詞「つくる」での基本語順

$$\begin{array}{c} \text{Ga} \\ \text{Ni} + \quad + \text{O} + \text{V} \\ \text{Op} \end{array}$$

これらの3つの基本語順は、動詞「つくる」で少し動揺もあるが、かなり安定しているという共通の特徴を持っている。それにかかわらず、基本語順の中身は違うという、相違した特徴も存在する。すなわち、「ガ格」と「ヲ格」の語順関係に限っていえば、次の通りで、違いが認められる。

- (1) 動詞「かく」での「ガ格」「ヲ格」の語順

$$\text{O} + \text{Ga}$$

- (2) 動詞「たべる」「つくる」での「ガ格」「ヲ格」の語順

$$\text{Ga} + \text{O}$$

#### 4. Chomsky 的立場から見た、Chomsky の主張

Chomsky の言語発達に関する主張の要点は、1.1 で触れたように4つある。すなわち、

「Chomsky の考え」から「Chomsky 的考え」へ（岩立）

- (1) 言語構造と言語行動の区別
- (2) 言語構造を言語行動の前提とする
- (3) 言語構造は外形からはうかがい知れない
- (4) ことばの獲得は驚く程はやい

次に、これらの主張に対する、Chomsky 的立場からの考えについて、3で示された結果を参考にして述べる。

#### 4.1 言語構造と言語行動の区別

Chomsky 的立場には、この両者の区別はない。いいかえれば、Chomsky 的立場では、言語構造の存在をみとめない。言語発達研究にとって重要なのは、抽象的で実態の不明な言語構造ではなく、生の言語行動である、と同時に、その言語行動を支配している各種の規則である。各種の規則の発見の積み重ねが、いつの日か Chomsky が考えるような普遍的な言語構造の確定に結びつくかもしれない。しかし、はじめから普遍的な言語構造を設定する必要はないだろう。3で述べた、格枠に基づく語順の存在や動詞形に関する「くっつき説」は、あく迄仮説で、これからの多くの研究がその正否を決定するだろう。

#### 4.2 言語構造が言語行動の前提である

4.1 で述べたように、言語構造の存在を認めないので、この主張はなりたっていない。

#### 4.3 言語構造は外形からはうかがいしれない

4.2 同様、言語構造を仮定しないので、この主張は、Chomsky 的立場ではあまり意味がない。また、言語行動は、3.1 で述べた3つの困難があるとしても、外形から知ることができるだろう。3での結果が示すように、言語発達はなんらかの規則に支配されている。もちろん、3で示されたような語順や動詞

形に関する外面的な結果が、別の視点から、違った形の規則に基づいて解釈される可能性はあるが、外面的な観察や実験から、規則の発見が可能ということとは間違いないだろう。この点に関しては、行動主義者や比較行動主義者の立場と一致する。

#### 4.4 ことばの獲得は驚く程はやい

言語獲得のはやいことは、言語の生得性を主張する根拠の1つであった。すなわち、これ程言語獲得がはやいからには生まれながらに子供は言語の中心的構造についての知識を持っているに違いないと推論する。しかし、はやさというものは相対的なもので、ある基準から見れば確かにはやくとも、別の基準からみればそうではない。Chomsky 的立場では、はやいというよりもおそいということを強調したい。格柙のできてくるまで、また、各種の動詞形が獲得されるまでには、いくつかの踏まなければならない道筋がある。言語獲得はそれ程単純ではない。おそらく、言語獲得は美しい綿密な規則に支配された険しい山登りであり、そのことをこれからの研究が明らかにするだろう。

### 5. まとめとむすび

これまで述べて来たことの要旨は次の通りである。

生成文法的アプローチに対する批判が多く出ているが、この批判が適切なものかどうかを考えるには、生成文法的なアプローチの二つの面 (Chomsky の立場と Chomsky 的立場) に配慮して、これらの批判の適否を決める必要がある。結論的に言えば、批判の多くは Chomsky の立場に向けられているだけで、もっと重要な Chomsky 的立場には向けられていない。生成文法的なアプローチの主流は、Chomsky 的立場のもので、この流れは、もっと評価される必要がある。そのために、最近の研究成果の一部が、「相違部分」と「共通部分」の追究という観点から紹介された。

「Chomsky の考え」から「Chomsky 的考え」へ (岩立)

学問的主張は、それが科学的であろうとすれば、かなりの量の資料の蓄積の結果としてなされるべきであろう。しかしそのような蓄積が実現するまでに、このままでは10年以上かかるのに対して、ある種の未熟な段階での方向づけをするような主張があれば、その期間が大巾に短縮されることが予想される。その場合には、その種の資料不十分な段階での主張も必要だろう。未熟な段階の主張は、それが無意味に終わる可能性もあるが、未来の研究の繁栄を暗示している場合もある。この論文はそのような1主張である。

## 文 献

- Bloom, L. (1970) *Language development: Form and function in emerging grammar*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Brown, R. and Fraser, C. (1964) The acquisition of syntax. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 29, 43-79.
- Brown, R. (1973) *A first language/The early stages*. Harvard U.P.
- Chomsky, N. (1957) *Syntactic structures*. The Hague: Mouton.
- 原田 信一 (1977) チョムスキーの理論と方法 月刊言語 6, 2, 10-17.
- 岩立志津夫 (1979 a) 幼児言語において発話文法は可能か? 月刊言語 8, 8, 78-86.
- 岩立志津夫 (1979 b) 一日本語児における初期言語獲得 日本女子大学児童研究所紀要 4, 26-31.
- 岩立志津夫 (1980) 一日本語児の動詞形の発達について 学習院大学文学部年報 27, 191-205.
- 岩立志津夫 (1981 a) 発話研究の行方 心理学四面鏡 (詫摩武俊編) 新曜社 251-262.
- 岩立志津夫 (1981 b) 日本語児の初期発話における語順 教育心理学研究 29, 2, 11-17.
- 神尾 昭雄 (1973) 言語獲得のしくみ 月刊言語 2, 9, 722-729.
- 神尾 昭雄 (1977) チョムスキー理論の心理学的側面 月刊言語 6, 2, 18-25.
- 古関すま子 (1978) 言語発達研究への現象学の提起 —「模倣性」と「生得的言語能力」の議論を中心に— 心理学評論 21, 2, 127-136.
- Leopold, W. F. (1970 (1939-1949)) *Speech development of a bilingual child: A linguist's record*. AMS Press.
- McNeill, D. (佐藤・松島・神尾訳 1972) ことばの獲得 —発達心理言語学入門— 大修館

「Chomsky の考え」から「Chomsky 的考え」へ (岩立)

- 宮原 英種 (1977) ことばの獲得 日本語と文化・社会 1 (野元・野林監修) 85-118.  
三省堂
- 宮原英種・宮原和子 (1973) アメリカにおける幼児言語の研究の動向 一二語発話の  
初期文法を中心として一 心理学評論 16, 1, 18-40.
- 宮原英種・宮原和子 (1975) 言語獲得 児童心理学の進歩 14, 51-70.
- Morton, J. (芳賀純訳 1976) 心理言語学 研究社
- 村田 孝次 (1977) 言語発達心理学 培風館
- 村田 孝次 (1981) 言語発達研究 一その歴史と現代の動向一 培風館
- 大浜幾久子 (1978) ピアジェと言語習得理論 心理学評論 21, 2, 137-143.
- 大久保 愛 (1975) 幼児言語研究と生成理論 新日本語講座 2 汐文社 247-270.
- 坂野登・天野清 (1976) 言語心理学 現代心理学双書 第3巻 新読書社
- Sinclair, H. (山内訳 1978) ことばの獲得と思考の発達 誠信書房
- Slobin, D. I. (宮原・中溝・宮原訳 1975) 心理言語学入門 新曜社
- Stern, C. and Stern, W. (1907) *Die Kindersprache*. Leipzig: Barth.
- 綿卷 徹 (1979) 初期多語発話の統語=意味論的分析 教育心理学研究  
27, 2, 131-140.
- Wundt, W. (1912) *Völkerpsychologie*. Engelmann.
- 山田 洋子 (1980) 言語機能の基礎 心理学評論 23, 2, 163-182.